

---

# もう何も怖くない

海堂莉子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう何も怖くない

### 【Nコード】

N6353Z

### 【作者名】

海堂莉子

### 【あらすじ】

地味で真面目がモットーの有馬那津子と少々だらしなさが目立つ中村小太郎。そんな二人の恋物語。

## 第1話

鏡に映る姿を念入りにチェックする。

染められることのない髪は肩よりも若干短く、前髪は目にかからない程度に、制服の乱れは一切なく、スカートの丈は膝まで。

最後に黒縁の眼鏡を装着して、完璧な真面目人間が出来上がった。出来上がりに満足した私は、家族の待つダイニングへと足を向けた。

「おはようございます」

「おはよう」

朝の挨拶はしっかりと相手の目を見て。

父も新聞から目を外して私を出迎えてくれる。

「今日も完璧だな」

「そうですね？　ありがとうございます」

嬉しそうに微笑む私を複雑な表情で父は見た。父とてこんなに真面目くさった姿で真面目くさった挨拶をされるのは寂しいのだろう。家族なのだからもっとフランクに、もっと楽しく過ごしたいと思っっているのだろう。その気持ちは分かっているつもりだ。でも、今の私にはこうすることしかできないのだ。

真面目に、地味に。

それが今の私の合言葉なのだから。

私の通う学校は、最寄りの駅から3駅、駅を降りて徒歩でおよそ10分といったところにある。

電車は必ず女性専用車両に乗る。朝の女性専用車両には、女性特有の化粧品や香水の臭いが充満しており、息が詰まるほどではあるが、一般車両に乗るよりはましだろう。

電車に乗り込むと必ず決まった席に着き、カバンの中から読みさ

しの文庫本を取り出す。本を読んでいれば3駅などあつという間の時間だ。

駅の改札を潜ると、同じ学校の生徒たちが歩道からはみ出して通行車両の邪魔になっているのを気付かぬふりで歩いているのが目に入る。

注意したいが、注意をすれば決して時間内に学校に入ることはいきないだろう。それほど多くの人が交通マナーを守っていないということなのだ。

私は歩道をきちんと歩き、前を見据えて歩く。

顔なじみの近所の老人に会うと、挨拶を交わす。

女生徒が大きな声で笑っているのが目につく、私は少し眉を潜めるものの、何も見えなかったかのように再び前を見据える。

校門を潜り、昇降口に入る。教室に入ると目の合ったクラスメイトに挨拶をする。相手が聞いてなくても構わなかった。

自分の席に着く前に、通りすがった男子生徒の腕を掴んだ。

「ネクタイが曲がっています。直しますので、まっすぐ姿勢よく立ってください」

驚きながらもぴしりと姿勢を伸ばした。ネクタイを真っ直ぐに整えると、につこりとほほ笑む。

「はい、出来上がりました。とても素敵になりましたよ」

軽く一礼すると自分の席へと再び足を向ける。

「あつ、少し髪が乱れていますね。こちらを向いてください。直します」

結び上げられていた髪に若干の乱れがある女生徒を見つけて、有無を言わずこちらを向いて座らせた。

「なっちゃん。今日は大人っぽい感じにして。今日は彼とデートなの」

女生徒は私にリクエストをつける。

「解りました」

素早く結び上げられていた髪を解くと、手際よく再び結び上げて

いく。

終わると大げさすぎる賛辞を受け取り、漸く席に着く。

これが真面目人間、有馬那津子ありまなづこの朝の風景である。

\*\*\*\*\*

「ババアっ。なんでもっと早く起こしてくれなかったんだよっ」

「バカだねっ。起こしたに決まってるだろう。起きないあんたが悪いんだ。あんたの飯はもうないよ。健太郎が食っちゃったからねっ」

「ざけんなよっ。俺は朝食わないと授業に身が入らないんだよ」

ボサボサの頭を掻き回しながら、不平不満をぶつける。

「あんたが授業なんて聞いたことがあんのかい。聞いてたらもっといい成績を貰ってるだろうがっ。腹が減ってるんであれば、コンビニにでも行くんだね。私はもう出るんだから、あんたの相手している暇はないんだよ」

身ぎれいに整えられた母親はもうすでにカバンを肩にかけていた。寝起きの苛立ちを壁を蹴ることで発散させ、急いで部屋へと踵を返す。

鏡なんて見ていられない。髪がぼさぼさなのを直す暇もない。顔を洗うことも、歯を磨くこともせず、制服を身に着けると、何も入っていないカバンを持って家を出た。

家から学校まではチャリだ。かつ飛ばせば5分で着くだろう。普通の人だったら15分〜20分はかかる距離だ。

籠の中にカバンを放り込むと、髪が乱れるのもお構いなしに全力でチャリをこぐ。コンビニに寄る時間は悔しいが残されていない。仕方ない。クラスメイトから弁当を掠め取るしかなさそうだ。

校門の前には、風紀委員の生徒と先生が立っていた。先生は校門を今まさに閉めようとしているところだった。

その隙間をチャリですり抜けた後、大きな声を挙げた。

「先生、おはようございます」

「こらっ、中村。もっと余裕を持って来いといつも言っているだろうがっ」

「いいじゃん。遅刻はしてないんだからさっ」

先生がさらに何かを喚いていたが駐輪場までチャリを走らせた俺には聞こえない。校門はクリアしたが、まだチャイムまでに教室に入らなければならぬという使命が俺にはあるのだ。先生の小言には付き合っていられない。

籠の中のカバンをむんずと掴むと俺は一目散に走りだした。鍵はこの際かけない。こんなオンボロチャリを盗む奴はいないだろう。盗まれたら、いい加減新しいチャリを買ってくれるだろう。そんな期待を若干含みつつ。

俺が昇降口に入った頃には、生徒の姿は一人も見当たらない。みなもう教室に入っているのだ。チャイムが今か今かと迫っている。不運なことに俺の教室は四階。三段飛ばしで階段を駆け上がるとさすがに息が乱れるが、毎日同じことをしていれば自然と体力もつく。

結局俺は、チャイムと同時に教室に滑り込んだのだ。

「中村っ。お前はまたぎりぎりかっ。まったく。とにかく早く席につけ。よし、ホームルームを始めるぞ」

俺はせえせえと肩で息をしながらどかりと席に着いた。

これが少々だらしなさが否めない、中村小太郎なかむらこたろうの朝の風景だ。

## 第2話

刺さるような視線を感じて、隣を窺った。

隣の席に座る有馬が食い入るように俺を見つめていた。いや、もはや見つめているのではない。観察されているというのが正しいところか。

恐ろしいほどに美しく伸ばされた背筋、寝癖なんて一つもない美しい黒髪、地味を絵に書いたような黒縁眼鏡。本人は完璧に自分は地味だと思い込んでいるのだろう。確かに彼女は一見すれば絵に描いたように地味だ。だが、残念なことにそう思っているクラスメイトは少ない。

真面目な彼女は、乱れた服装や髪型が我慢出来ないようで、登校すると目についたものを片っ端から直してゆく。

間近で見る彼女からは、地味なオーラはまるでない。整えられたあと、

「はい、素敵です」

と微笑まれる。地味の鎧をかぶっていても、全身から隠し切れないうまささを醸し出している。その笑顔を見てしまったクラスメイトは、男女関係なく一瞬にして惹かれてしまうのだ。

彼女に直して貰いたくて、わざと寝癖を直さずに来る奴までいる始末だ。

そんなクラスメイトたちに彼女はまるで気付いていない。

このクラスの中で一番彼女にお世話になったのは、間違いなく俺だろう。

同じクラスになったその日から半年以上がたった今でも彼女は俺の身嗜みを直してくれている。

クラスで一番だらしない、なんて自慢にもならないが、それが事実なのだ。

別に彼女に直して貰いたくてわざとそうしているわけではない。

朝が本当に苦手な俺は、どうしても起きられず、ぎりぎりの時間になってしまふのだ。

そして今日も、ショートホームルームが終わると同時に彼女に捕まった。

「中村君、直ちに立ってください」

有馬のオーラに気圧されたように立ち上がった俺の全身を、一通り下から上、上から下と眺めると、うーん、と小さく唸り声をあげた。

「相変わらず、だらしなさが素晴らしいです。やりがいがあります  
貶されているのだろうが、なんとなく嬉しく思ってしまう自分は  
どうかしているんだと思う。

「すみません」

踏みつぶした上靴を片足を上げながら直していく。汚い上靴も汚い足も　一応足は洗っているから綺麗だが　全く気にならないのか、躊躇することなく俺の足を掴む。

「今度、家からブラシを持ってこようと思います」

「は？」

「中村君、あなたいつ上靴を洗いましたか？」

「いや、一度も洗ってない」

「そうだと思います。ですので、金曜日の放課後に学校と一緒に洗いましょう。そうすれば、上靴は綺麗になりますし、家の上靴を忘れることもないでしょう」

妙案とでも言いたげな彼女の微笑みを見下ろし、頬が赤くなっていくのがわかる。

今の言葉から察するに、彼女は俺の上靴をともに洗ってくれと言っているのだ。一度も洗っていない、もう手遅れなのではないかと思うほどに真っ黒なこの上靴を。

「いや、悪いからいいよ」

「いいえ、必ず洗います。このままでは、上靴が可哀想です」

問答無用というように、下から睨みつける彼女は、少しも怖くな



い。むしろ可愛いと思ってしまったことは、彼女には内緒だ。  
「分かったよ」

\*\*\*\*\*

隣の席の中村君のだらしのなさは天下一品だ。

彼の登校時のだらしなさといったら、公園などで生活をするホームレスと同レベルと言ってもいいのではないか。場合によっては、ホームレスのほうが身だしなみはしっかりしている。

私の朝の毎日は、彼の身だしなみを整えることから始まると言っても過言ではない。

恐らく彼は、相当朝が苦手なのだろう。とりあえず制服だけを身につけて、学校へ現れたのだ。

上靴のかかとは履きつぶされ、ベルトはだらしなく垂れて、ズボンはずりずりと腰どころかパンツが半分以上出るほどにずり落ちている。ブレザーの前ボタンは全開、そこから覗く白いブラウスは皺くちゃで、ボタンは掛け違えている。ネクタイは首からぶら下げているだけだ。

目じりには目やにがついたまま、恐らく歯磨きをする時間もなかっただろうと推察する。頭はもはや爆発コントの後のありさまだ。アフロじゃないのにアフロになっている。

上靴をきちんと履かせた後、ブラウスのかけ違いを直した。そのとき、若干自分が男の人の衣服を脱がせているような気がして恥ずかしくなった。ちらりと上方を覗けば、中村君も恥ずかしげに頬を染めているのを見ると、同じ思いを感じていたようだ。

「あのさ、有馬。俺、それくらい自分で出来るからさ。そこまでやってもらわなくても……」

「そうですか？ では、ご自分でやってください」

ここは大人しくその申し出を受け入れる。が、きちんと事を成すか始終監視することは譲れない。

中村君は、ネクタイを締めるのが苦手なようだ。見かねて私が出す。どうやら相当苦手なようで、あっさりと私に委ねた。そのホツとした顔を見ると、くすりと笑いが漏れるのだ。

「では、中村君。流しで顔を洗って、歯も磨いてください。その頭も豪快に水をつけてしまったほうがいいかと思えます」

「ん」

中村君は、私がこんなにしつこくしても決して怒ったり、鬱陶しがったりすることはない。

きちんと身だしなみを整えていれば、中村君の姿はとても優雅なのだ。一般的に見て整った顔も、一般よりも多少高い身長も、物腰の柔らかい笑顔も、女の子には人気がある。登校したときの中村君を見て、驚く女の子も多いが、そんなだらしないうところもなんだか可愛い、と思っている女の子はあまりに多い。

私の立場を羨ましいと思っている女の子は多くいる。変わってほしいと願い出る子がたまにいたのだが、そういう子が中村君に近づく、彼は困った顔で断るのだ。

「ごめん。やって貰っても、きつと最後は有馬にやって貰うことになるからさ」

確かにミーハーな女の子の身だしなみチェックは甘く、あとでこっそり私が直すのが常だ。

「ごめんな」

そう言っただけでほほ笑む彼を見て、女の子たちは撃沈しても嬉しそうに帰っていく。それがたとえアフロでも。彼の笑顔の威力は凄まじいことを物語っているようだ。

「なあ、有馬。いつも、ありがとな」

水の滴ったまま向けられた笑顔に私は思わず惹きつけられた。

## 第2話（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。

この作品は、第17話で完結する予定で、もうすでに書きあげてあります。その間に中途半端になっている「無邪気な恋心」を書き進めていき、こちらが完結次第そちらも更新を再開するという形にしたいと思います。

最後までお付き合いいただければ嬉しいです。

### 第3話（前書き）

あけましておめでとございます。  
今年もよろしくお願いいたします。

2012年1月

### 第3話

金曜日の放課後を心なし楽しみにしていたのは、私だけの秘密だ。朝から始まる中村君とのあれこれを楽しみにしている私は、恐らく彼が好きなのだろうと思う。

誰かを好きになると、その人のために綺麗になりたいと思う。私だってその気持ちは、その辺の女の子と一緒にだ。違うのは、たとえば私がそう思ったとしても頑として地味を貫くということだろうか。少しばかり思い浮べる。流行りのファッションと流行りのメイクをした自分を。だが、すぐに打ち消す。

それは、私には許されていないことなのだ。ふと甦りかけた記憶を強制的に押し込めた。

「さあ、中村君。上靴を洗いましょう」

私ที่บ้านから持参したブラシと靴磨き材等を見て、中村君は諦めたように頷いた。

「分かった」

流しは教室を出るとすぐにある。

「中村君、これを履いてください」

私がスリッパを差し出すと、一瞬だけ目を見開いて、そのあと呆れたように笑った。

「用意周到だな」

困ったように笑う中村君をしばし見惚れた。

眉が下がり、いつもよりも優しいイメージを感じさせた。

「当然です。上靴を脱いでしまったら、足は冷えてしまいますし、靴下が汚れてしまいますから」

「なあ、有馬のそれ、癖なのか？」

「それ？」

「敬語。誰にでも敬語だろ？」

「ああ、そうですね。癖のようなものです。気になりますか？」  
あの日からだ。

私が敬語を貫き通すようになったのは……。

『私が真面目だったなら……、私がもつともつと地味だったなら……』

過去の私の声か頭をかすめ、慌てて振り払うように振った。

今でも鮮明に覚えている。だが、それを引き出すのは危険なことだ。

「どうした？ 具合悪いのか？ 俺のために無理しないで帰ったほうがいいんじゃないのか？」

心配そうに覗き込む中村君の顔は、きっと私よりも蒼白だろうと思う。

「大丈夫です。ちょっと考え事をしてしまっただけですから」

中村君の真つ黒な上靴を水にぬらしておもむろにブラシで擦り始めた。

私が大丈夫だと納得したのか、私に倣って中村君も手を動かす始めた。

「俺。上靴なんて洗うの高校入ってから初めてかもしれないな」

「えっ。私たちもう2年生ですよ？」

「上靴なんて1年間一度も洗わなくても、履いていられるだろう？ 進級と一緒に上靴も新調するから上靴を洗う必要性を感じなかつたんだよ」

思い起こしてみれば、中村君とこうやって改めて話すのはこれが初めてかもしれない。

「それは、不衛生ですね」

「まあな。でも、男ならこれくらい平気だけだな」

けらけらと悪びれずに笑う中村君の横顔をちらりと窺った。

袖をまくって現れた逞しい腕に、うっすらと青い筋が浮かび上がって見える。私とは違う筋肉質な腕に触れてみたいと思ってしまう

た。

「ど、どうした？」

思っただけでは留まらず、濡れた手で思わず触れてしまった中村君の腕。私の手が冷たかったのか、びくりと震えた。

「ごめんなさい」

真つ赤になつてしまったであろう顔が上げられなくて、一心不乱に上靴を磨いた。

\*\*\*\*\*

「ごめんなさい」

消え入りそうな声でぼそぼそと呟くと、有馬は俯き、上靴磨きに没頭してしまった。

濡れた手で触れられた腕が、奇妙に熱を帯びていた。

地味で真面目な（を装っているように思える）彼女が、俺はいつの間にか好きになっていった。毎朝繰り広げられる一連の行為は、俺にとつてはいつしか特別なものになっていった。

彼女にしてみれば、ただの善意でやってくれていることにすぎないことは十二分に分かっているつもりでいるが、知ってしまった気持ちはもう後戻りできそうになかった。

もつと彼女を知りたい。

「なあ、有馬は家でもそんな感じなのか？」

「そんなとは？」

「うーん、例えば敬語で話したり、きつちりとした服装に、きつちりとした生活態度。それから、そのメガネ。家でもかけてるのか？ それって伊達だろ？」

「どうして解つたんですか？ これが伊達だつてことに」

「そんな驚くことじゃないだろ。こうやって隣りに立ったり、後ろに立ったりすると、そのレンズ越しの風景が見えるんだ。レンズに度が入つてると、ぼやけて見えるけど有馬のレンズは肉眼で見るの

と変わらない」

別に伊達メガネを付けていたって構わないと思うんだ。おしゃれとしてメガネをかける人だっているわけだから。ただ、有馬の場合はその理由がおしゃれではないのだろう。

「視力は本当はいいんです」

「別にいいよ。おしゃれでかけてるわけじゃないことは分かるけど、その理由を無理やり聞こうなんて思っただけからさ。ただ、家でもそうなのかと思ってさ」

「家でもかけてます。家での私も学校での私も変わりはありません。家でも学校でも素の自分が全く変わらない人間は、あまりいいのではないか。みな、少なからず違って、家のほうがやっぱりリラックスしているという人のほうが多いはずだ。」

有馬の場合、本当に彼女が言うとおりに家と学校の区別がないのなら、相当自分を殺しているのではないかと思えた。彼女が学校で素を出しているとは思えないからだ。

彼女が素の自分を出す場所があるんだろうか。

「なあ、有馬。本当のお前ってどんななんだ？」

彼女がヒュッと息を呑むのがわかった。

上靴を磨く手は二人とも止まり、互いを見つめあっていた。

放課後の廊下には、もう人は通っていない。みな、いそいそと出て行ってしまった。階下で騒ぐ声がわずかに聞こえるばかりで、この階に人が残っている気配はない。

彼女が緊張しているのが分かった。

「ごめん。変なこと言ったな。気にしないでくれ」

彼女の視線から逃れて再び上靴に手を伸ばした。

本当は、もっと問い詰めたかった。彼女が何を抱えているのか。何を悩んでいるのか。何に救いを求めているのか。知りたかった。俺が彼女の安らぎになれたらと思った。

だが、彼女が詰めていた息を吐いたのを聞いてしまったら、それ以上問い詰めることなど出来そうになかった。



俺はなんて役立たずなんだろっ。

## 第4話

俺の上靴は、驚くほどに綺麗になった。と思っているのは俺だけではない。

半年間も積み重ねられた汚れはちよつとやそつとでは落ちない。

俺的には、綺麗になったレベルではあったが、有馬は不服そうに顔を顰めていた。

「ありがとな。これだけ落ちれば十分だ」

途中、飽きた俺が放り出そうとした片方を有馬が結局磨いてくれたのだ。その時には、有馬が磨いていた方は十分に美しかった。

正直、靴磨きを甘く見ていた。腕は疲れるし、腰は痛くなる。いくらやってもなかなか落ちてくれない。

終わった時には、解放されたことに心底ホッとしていた。

「もう暗いから送ってくよ。有馬は電車通だったよな？」

「一人で大丈夫です」

「危ないから送らせてよ。俺、心配で気になって夜寝れなくなっちゃうからさ」

有馬が頷くのを見て、ホッとした。

まだ少し離れがたかったのだ。こんな気持ちでいるのは、俺だけだとは承知しているが、後少しだけ。

有馬は地味に見せかけているが決して地味ではない。内面の話だ。コミュニケーションに物怖じするタイプではない。心底真面目ではあるが、極度な人間不信であるわけでもなさそうだ。

限りなく真面目で地味な生活を自分に課しているように感じた。

それを苦に感じないほどに長いことそれは続けられたのだと、俺は睨んでいた。

本当の彼女を暴きだしたいと思った。だが、それが彼女の望んでいることとは限らないのだ。

「有馬は部活とか入ってないよな？」

「はい。私には門限があるので、部活には出れないんです」  
門限。

高校生の娘を持つ家ならば当たり前前に存在するものなのだろうか。身近に門限を気にする女がいないので、その言葉が異様に新鮮に感じた。

「門限なんてあるのか？」

「はい。親が異様な心配性で。高校生なんだからもう少し融通してくれればいいんですけど……」

「門限、何時なんだ？」

「6時です」

俺は腕時計に目を落とした。もうすでに5時半を過ぎてしまっている。

「なんだよ、門限までに間に合わないんじゃないの？ 親、厳しいのか？ 大丈夫なのか？」

「いえ、大丈夫ではないんですけど」

「なんでもっと早く言わないんだ。俺の上靴なんて悠長に洗ってる場合じゃないだろう？ とにかく後ろに乗れ」

少し強い口調になってしまったことに、言いながらすでに後悔していた。だが、言い出してしまったことを途中で軌道修正することは出来そうになかった。

「ごめんなさい」

びくりと体を強張らせた有馬を、自転車の後ろに乗せ、俺は駅までの道を走らせた。

「俺のために怒られなくていいんだよ。俺だって上靴の一つくらい一人で洗えるんだぞ。無理して俺に付き合う必要なんてないんだ」

俺の声が聞こえているのかいないのかは分からないが、彼女の手が力強く俺の服を掴んでいた。

もしかしたら、強く言い過ぎて泣かせてしまったのかもしれない。そう思いはしたが、今の状況で後ろを振り返ることは出来そうになかった。

\*\*\*\*\*

私は無性に嬉しかった。

少し強めの中村君の声と真剣に心配してくれているその少し怒りを含んだ表情。本当は少し怖かった。けれど、私のことを考えてのことだと解っているのです、その怒りさえも嬉しさに代わっていた。彼の服をギュッとキツく握りしめた。

涙が零れそうだった。

きつと今私が泣き出してしまつたら、彼は完全に誤解するだろう。自分の物言いが私の涙を誘つたのだと、優しい彼は後悔するかもしれない。

本当は違つのに。私はそれを上手く説明することもできずに、後悔し続ける彼を見ることしかできないだろう。

だから、私は今、決して泣いてはいけないのだ。

親以外で私を叱ってくれた人は、彼が初めてかもしれない。もちろんそれは、あの時からだ。あの時から私は、あまり叱られなくなった。今までは散々叱られていた怖いクラス担任の教師でさえも私を叱らなくなった。親でさえ、私をあまり叱らない。

今日、門限を過ぎて帰つた私に二人は心配そうな表情を浮かべるだけで、決して怒らないだろう。それを承知で、少し遅く帰つてみようと考えていたのかもしれない。

あの時を忘れたいと思つているのは私だけじゃない。だが、私以上に両親はあれを忘れてはくれない。いつも何かに怯えたような表情を浮かべ、私に思い出させるのだ。

自転車は、あつという間に駅へと運んでしまった。

涙が出そうな私は、早く彼と別れたいと思つのだが、それとは相反した部分ではもう少し時をともに過ごしたいと思つのだ。

「有馬君、ごめんなさい。あと、ありがとうございます。それから、また来週」

「ちよつと待つて。俺、チャリ駐輪場に置いてくるから。心配だから家まで送る。なんなら、俺が遅くなつたわけを話すから。ちよつと待つてろな」

断るすきすら与えずに、中村君は自転車に乗って走って行ってしまった。残された私は、待たないわけにはいかなかった。

複雑な気持ちではあつたが、もう少しだけ彼といられることが嬉しかった。

駅横の駐輪場に自転車を置いて、走って戻ってきた中村君の額には、うつすらと汗が滲んでいた。

「そんなに急がなくても大丈夫ですよ？」

「大丈夫じゃないだろ？ 早く行こう。有馬んちの駅はどっち方面？」

私が最寄駅の名を告げれば、ちよつとそちら方面行きの電車が到着するところだつた。自然に手を取られ、改札の中へと引かれた。

「少し走れるか？」

中村君の表情からは、先ほどの怒りはもう感じない。強引には感じないその手の温もりが私を導いてくれるような錯覚に陥つた。電車までへの道ではなく、もっと壮大なもの。大げさに言つてしまえば、人生の道筋を。

どこまでも、その背中についていきたいと思つた。その許可すら貰つてもいないのに。追いかけることすら許されていないかもしれないのに。そう考えると、その背中がなんだか切ないものに見えてしまった。

中村君の手に引かれ、閉まる間に電車の中に吸い込まれた。まるで図つたかのようなタイミングで私の背後でドアが閉じられた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6353z/>

---

もう何も怖くない

2012年1月6日11時47分発行